



Corporate Edition feature guide

by SparxSystems Japan

Enterprise Architect 日本語版

コーポレート版 機能ガイド

(2015/02/12 最終更新)



1.はじめに

現在デスクトップ版やプロフェッショナル版をご利用になっている方向けに、コーポレート版の特徴と利用のメリットについて説明します。

なお、コーポレート版には、ライセンスを複数人数で排他的に共有することができるフローティングライセンスもあります。フローティングライセンスの機能は、スタンダードライセンスと同一です。フローティングライセンスに関する説明・詳細は、別ドキュメントとなっている「フローティングライセンス マニュアル」をご覧ください。

<https://www.sparxsystems.jp/bin/docs/LicenseManagerStartupManual.pdf>

「Enterprise Architect Suite」の各エディションは、コーポレート版のすべての機能を利用することができます。

2.コーポレート版の追加機能

プロフェッショナル版とコーポレート版の機能の大きな差異として、7点あります。ここでは、それぞれの機能について説明します。

- ・ セキュリティ機能
- ・ 外部データベースをリポジトリとして利用する機能
- ・ ベースライン機能とマージ機能
- ・ 監査機能
- ・ スクリプト機能
- ・ ステートマシン図・アクティビティ図のシミュレーション機能
- ・ データベースビルダー

なお、それ以外の細かい差異につきましては、下記PDFファイルをご覧ください。

<https://www.sparxsystems.jp/bin/docs/EAEditionsDetail.pdf>

2.1 セキュリティ機能

セキュリティ機能とは、以下の単位でアクセス権を制限することができる機能です。

- それぞれの要素単位
- パッケージ単位
- ダイアグラム単位

(以下、本ドキュメントでは上記の3つをあわせて「オブジェクト」と表記します)

これにより、不必要な修正からモデルを保護することができます。アクセス権が与えられる側の単位としては、次の二つがあります。

- ユーザー
- グループ

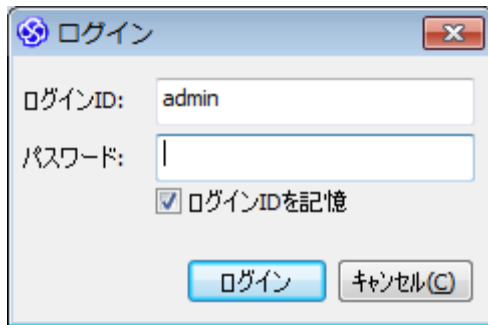
このユーザーとグループの関係は、以下のようになっています。

- 任意の数のグループを作成できる。
- 任意の数のユーザーを作成できる。
- ユーザーはいくつかのグループに所属させることができる。
- アクセス権はグループとユーザーに対して設定できる。
- 最終的なユーザーのアクセス権は、所属するグループのアクセス権とユーザー自身のアクセス権の和になる。つまり、対象のオブジェクトに対して、所属するグループかユーザー自身のいずれかにアクセス権があれば、アクセスできる。

のようになります。多くの場合には、グループにアクセス権を指定し、ユーザーをグループに所属させることでアクセス管理を行うことになると思います。ユーザー毎にアクセス権を付与するなど、より柔軟な指定も可能です。

なお、ユーザーについては、Windows の ActiveDirectory から情報を一括で読み込むこともできます。

このセキュリティ機能を有効にした場合には、プロジェクトの利用開始時に以下のようなダイアログが表示され、ユーザー情報を入力します。なお、オプション設定によっては、Windows のユーザーID をそのまま利用し、パスワード入力をスキップする設定を利用することもできます。



設定できるアクセス権の種類には、主なものを例として説明します。

- ユーザーの管理
ユーザーとグループ・割り当てられるアクセス権の管理ができます。
- ロックの管理
オブジェクトに対するロックの参照と解除ができます。
- ダイアグラムの更新
ダイアグラムのプロパティとレイアウトの変更ができます。
- プロジェクト情報の管理
プロジェクトのリソースや測定方法・リスクなどを変更できます。
- 要素の更新
要素やダイアグラム・パッケージ・リンクなどを変更することができます。
- XMI の出力
モデルを XMI 形式で出力することができます。
- XMI の読み込み
XMI 形式のファイルからモデルを読み込むことができます。
- テストの管理
テスト項目の変更・削除ができます。
- ステレオタイプの設定
ステレオタイプの追加や削除・編集ができます。
- ソースコードや DDL の生成
モデルの要素からソースコードや DDL の生成ができます。また、既存のファイルとの同期もできます。
- ソースコードや DDL からのリバースエンジニアリング
ソースコードや DDL を読み込んでモデルの作成ができます。また、同期もできます。
- ドキュメントの生成
DOCX/PDF/RTF と HTML のドキュメントが生成できます。

- **ダイアグラムの管理**

新しいダイアグラムを作成したり、既存のダイアグラムをコピーしたり、ダイアグラムの削除をしたりすることができます。また、ダイアグラムを UML パターンとして保存することができます。

また、セキュリティ管理機能には、大きく 2 種類のモードがありますので、プロジェクトの内容や性格により使い分けるとよいでしょう。

- 既定値では誰でも要素やダイアグラムを編集できる。対象の要素やダイアグラムを指定して明示的にロックすることにより、ロック時に指定したアクセス権を持たない人は利用できないようにできる。

(ユーザーとして自分を指定すれば、自分だけが編集可能になる)

- 既定値ではプロジェクト内の要素はすべて編集できない。対象の要素やダイアグラムを指定して「排他ロック」することで、排他ロックを実行した人だけが編集できるようになる。

(操作の手間が増えるが、同時編集を防ぐことができる方式。)

この機能は、「プロジェクト」メニュー→「セキュリティ」→「編集時には排他ロックが必須」から設定することで変更可能になります。

なお、セキュリティ機能の使用の有無はプロジェクト単位で指定します。多人数で共有する、重要なプロジェクトに設定するとよいでしょう。

2.2 外部データベースをリポジトリに利用する機能

この機能は、SQLServer や Oracle といったデータベース管理システム(以下、DBMS と表記します)上に Enterprise Architect のプロジェクトデータを格納する機能です。

Enterprise Architect のデスクトップ版とプロフェッショナル版では、Microsoft 製の Office に含まれる Access データベース管理ソフトウェアと同じ、JET と呼ばれるデータベースか、オープンソースのデータベースである Firebird データベースかのいずれかを利用することができます。なお、JET データベースは、データベーステーブルを 1 ファイル(拡張子 mdb)に格納して、主に 1 台のマシンで個人が利用するような簡易的なデータベースを簡単に効率よく動かすことに重点が置かれています。

そのため、Enterprise Architect のプロジェクトファイルを(ネットワークドライブに置

いて)複数の開発者が利用するような方法では、性能的な問題が発生する可能性があります。また、JET データベースは堅牢性がなく、ネットワークトラブルの際などにデータベースが破損する可能性があります。Enterprise Architect では、こういった場合に修復するための機能も提供していますが、万全とは言えません。Firebird データベースの場合は JET データベースよりも堅牢性がありますが、1つのファイルを同時に複数の人が開くことができません。

DBMS を利用することで、こういった問題を解決することができます。DBMS とは、ODBC を利用して接続します。最初に、ユーザーごとにこの ODBC の接続設定が必要になりますが、一度設定すれば、あとは通常通りに起動時のプロジェクト選択画面からプロジェクトを呼び出すことができるようになり、それぞれのユーザーはプロジェクトが DBMS 上にあることを意識することなく、作業を進めることができます。

DBMS では、多数の人が利用する場合の性能や安定性の面で高い効果がありますので、特に大規模でクリティカルな開発に対しては、効果があるといえます。

なお、Enterprise Architect では Oracle10g Express Edition や MSDE にも対応していますので、安価に DBMS 環境を構築することができます。

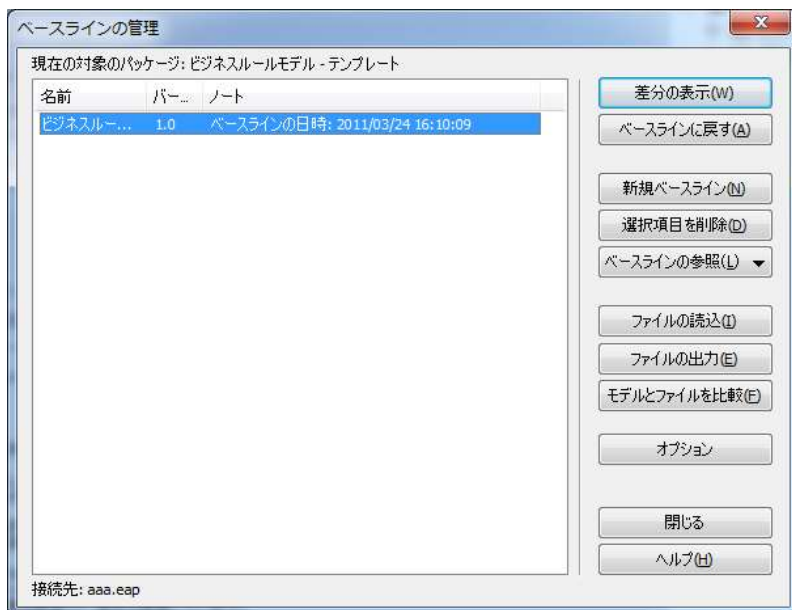
さらに、バージョン 11 からは「クラウドサーバ機能」が利用できるようになりました。この方法での接続の場合、Enterprise Architect がインストールされている環境に、ODBC ドライバをインストールして設定する必要がなくなります。また、HTTP や HTTPS でサーバと接続することもできます。

(サーバを設置する場所は、いわゆるクラウド(パブリッククラウド)である必要性はありません。社内で Enterprise Architect を利用する場合に、社内のネットワーク上にクラウドサーバを設定し利用することもできます。)

クラウドサーバについては、ドキュメント「クラウドサーバ 設定と利用ガイド」もご覧ください。

2.3 ベースライン機能とマージ機能

Enterprise Architect のパッケージに対して、任意に「ベースライン」として情報を保存することができます。この情報は圧縮してプロジェクトの内部に保存されます。



上の画面で「新規ベースライン」ボタンを押し、バージョンとコメントを入力して現在の状況のスナップショットを保存します。モデルを編集後に保存した内容と比較して、その後どのような編集を行ったかを確認することもできます。この結果は次のようなツリー構造と表形式の組み合わせでわかりやすく確認することができます。

モデルの要素	状態	プロパティ	変更	ベースライン
template		抽象別名	false	false
template	追加	作者	2004/11/05 14:40:56	2004/11/05 14:40:56
template	追加	作成日	2005/04/26 15:03:18	2005/04/15 0:52:47
sample	変更	難易度	1	1
template	変更	ファイル名	E:\Documents and Settings\kouno.SPARO\SYSTEMS\デスクトップ\Class33.java	E:\Documents and Settings\kouno.SPARO\SYSTEMS\デスクトップ\Class33.java
template	変更	言語	Java	Java
template	変更	IsLeaf	false	false
template	変更	ルート	false	false
取り	追加	キーワード		
sample	変更	多重度		
sample	変更	名前	ClassClassClass33	ClassClassClass33
sample	変更	ノート		
sample	変更	親パッケージ	template	template
sample	変更	保持方法		
sample	変更	フェーズ	1.0	1.0
sample	変更	可視性	Public	Public
sample	変更	状態	設計中	設計中
sample	変更	ステレオタイプ	EJBImplementation	EJBImplementation
sample	変更	型	Class	Class
sample	変更	バージョン	1.0	1.0
sample1	変更			
概要	変更			
付け				
表示				
DOL				
FAKITent				

既存の XMI ファイルをベースラインとして読み込むことも可能ですので、バージョン管理機能と組み合わせるとさらに便利になります。

さらに、過去のベースラインの一部の情報(要素や属性・操作など)を対象に、最新のモデルに反映させる「マージ」の機能も利用可能です。このマージ機能の詳細については、ドキュメント「差分比較とマージ 機能ガイド」をご覧ください。

ダイアグラムについては、要素の有無や位置の変更を見える形で表現し、モデルとのマージを行う機能も利用できます。



また、複雑な分散環境で適切にマージを行うための「マージファイル」を利用することもできます。このマージファイルの利点と使用方法についても、PDF ドキュメント「差分比較とマージ 機能ガイド」をご覧ください。

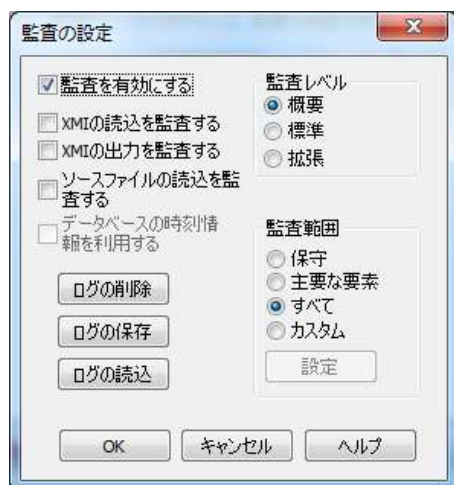
2.4 監査機能

監査の機能を利用すると、プロジェクトファイル内の要素や接続の操作を「監査」し、ログを取得することができます。

取得したログは一覧形式で表示され「いつ」「誰が」「何をしたか」がわかるようになります。この取得した監査ログの参照や設定は、メインメニューから「プロジェクト」→「監査ビュー」を実行すると表示される画面から行います。



「監視の設定」ボタンを押して「監視を有効にする」チェックボックスにチェックを入れてください。



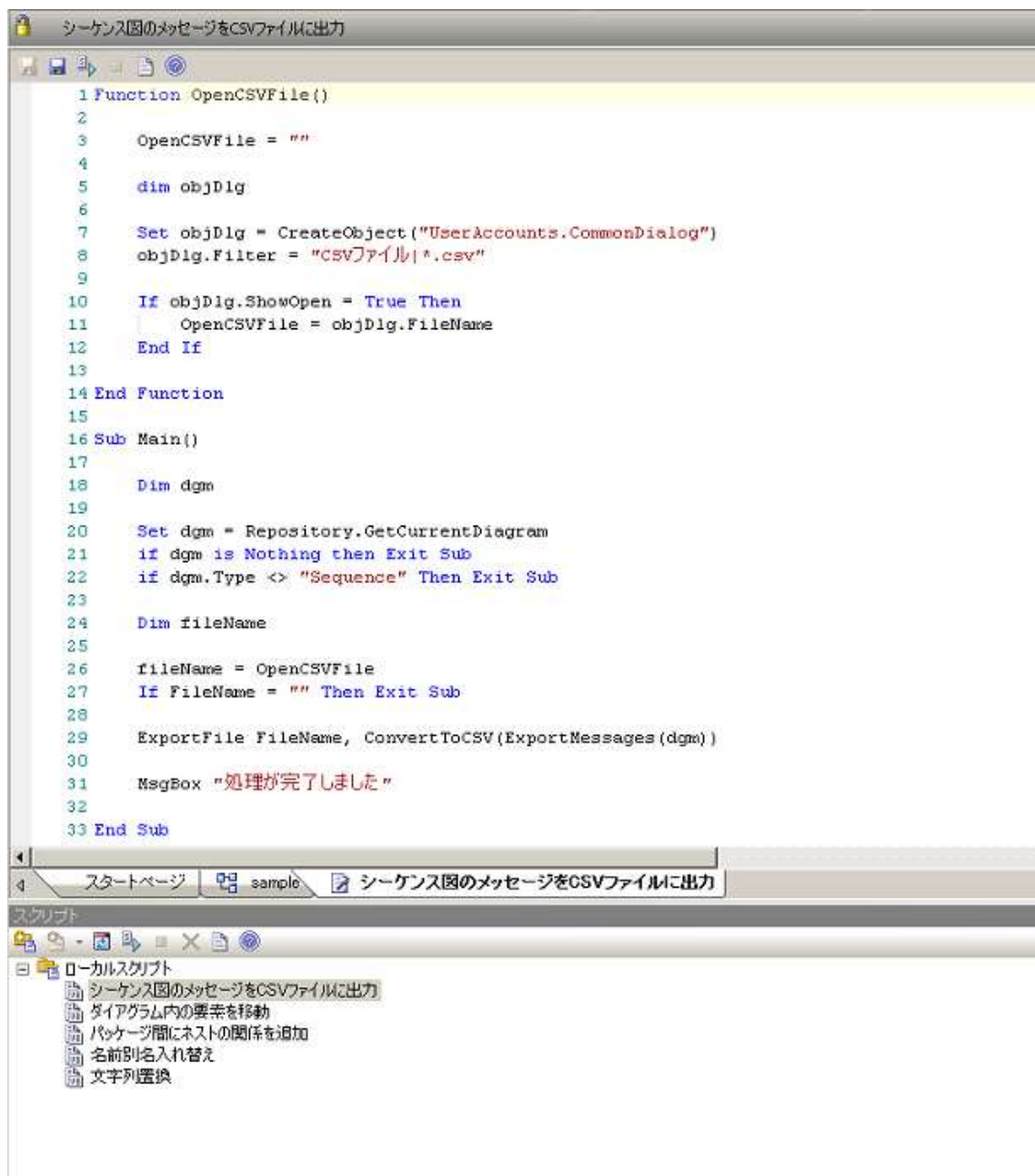
この機能はコーポレート版のみで利用できる機能です。監視機能が有効になると、古いバージョンやデスクトップ版・プロフェッショナル版ではプロジェクトを開くことはできません。

(補足:この制限は、監視機能が働かない古いバージョンやコーポレート版以外で編集することを防ぐための措置です。監視の機能を無効にすると、再度古いバージョンや他のエディションでも開けるようになります。)

2.5 スクリプト機能

Enterprise Architect には、作成した UML モデルを自由に参照・編集したり、Enterprise Architect の機能を拡張したりすることのできる API およびアドインの機能があります。ただし、これらの機能を利用するためには、C#や VB.NET などを利用して開発を行う必要があります。

スクリプト機能を利用すると、こうした設計開発環境を利用せずに、Enterprise Architect の内部で API を利用したスクリプトを作成・利用することができます。



このようなスクリプトは、モデル内の要素の一括処理に適しています。また、モデル内の情報のチェックなどにも有効です。

作成したスクリプトはプロジェクトに保存されますので、他のユーザーと強要することができます。また、他のプロジェクトにコピーすることもできますので、作成したスクリプトを広く活用して、チーム全体で設計開発の効率を向上させることができます。

2.6. ステートマシン図・アクティビティ図のシミュレーション

コーポレート版では、ステートマシン図やアクティビティ図について、高度なシミュレーション機能を利用することができます。作成したステートマシン図やアクティビティ図に対して、変数の定義や値の変更・値の参照や比較などで、処理を追加したり処理の流れを分岐したりすることができます。また、ステートマシン図では、任意のタイミングでトリガを発行し、動作を確認することができます。

詳細は、PDF ドキュメント「シミュレーション 機能ガイド」やヘルプファイルなどをご覧ください。

2.7. データベースビルダー

Enterprise Architect では、データベース設計に関する様々な機能を搭載しています。この機能をより効率的に利用することができるのが、このデータベースビルダーです。

データベースビルダーの機能を利用すると、Enterprise Architect で生成した DDL(テーブル定義)をそのまま SQLServer などの DBMS に渡して実行することができます。また、モデルと DBMS のデータベースの内容との差分の比較や反映も容易です。

3. 最後に

以上が、コーポレート版の機能の概要説明となります。これらの機能は、特に大規模・多人数での設計開発においては、重要な機能であると言えます。大規模な開発プロジェクトにおいて多人数で作業を行う場合やよりモデルを効果的に利用したい場合にコーポレート版は適していると言えるでしょう。

なお、既存のプロジェクトファイル(拡張子が.EAP や.FEAP のファイル)をデータベースに移動させることもできます。これにより、開発中のプロジェクトの内容をそのまま移行することができます。この方法については、移行マニュアルで具体的に説明しています。

○改版履歴

- 2008/03/06 Enterprise Architect バージョン 7.1 リリースに伴い、内容を更新。
- 2009/03/24 Enterprise Architect バージョン 7.5 リリースに伴い、内容を更新。スクリプト機能の説明を追加。
- 2009/07/31 SoaML プロファイルの説明を追加。細かい内容の修正。
- 2010/04/16 Enterprise Architect バージョン 8.0 リリースに伴い、内容を更新。
- 2011/05/18 Enterprise Architect バージョン 9.0 リリースに伴い、内容を更新。
- 2011/09/05 ドキュメントのタイトルを修正。冒頭の説明を更新。
- 2011/11/28 Enterprise Architect バージョン 9.2 リリースに伴い、内容を更新。
- 2012/03/07 Enterprise Architect バージョン 9.3 リリースに伴い、内容を更新。
- 2014/04/22 Enterprise Architect バージョン 11.0 リリースに伴い、内容を更新。
- 2015/02/12 Enterprise Architect バージョン 12.0 リリースに伴い、内容を更新。